

文体から見た日本児童文学の誕生

著者	犬飼 和雄
出版者	法政大学社会学部学会
雑誌名	社会労働研究
巻	35
号	3・4
ページ	7-25
発行年	1989-03
URL	http://hdl.handle.net/10114/5758

文体から見た

日本児童文学の誕生

犬飼和雄

明治二十四年の一月に輝かしい脚光をあびて登場した巖谷小波の『こがね丸』は現在に至るまで日本児童文学の原点とされ高い評価をうけている。同時にこの作品は、博文館が日本ではじめての創作児童文学シリーズ少年文学の第一巻として発表したもので、この作品の成功によつて「少年文学」シリーズ二十四巻は完結し、日本の児童文学の主流を形成していったのである。したがつてこの作品は単にすぐれた日本の一児童文学が生まれたというだけではなく、児童文学全体に与えた影響は大きいものがあつた。現在に至るまで、この作品がいろいろな形で評価されるのは当然のことである。

この「少年文学」シリーズは主として明治文壇の主流をなした硯友社の作家達の手になる作品が多かつたが、それも小波が硯友社の一員だつたからに他ならない。例えばこのシリーズの第二巻は硯友社の中心的人物尾崎紅葉による『二人掠助』だつた。もつともこの作品は創作ではなくアンデルセンの童話の翻案であつた。紅葉はこの他にも児童文学を二、三手がけたが、小波の影響によるところが多いと思われる。つづいて江見水陰の『今弁慶』、山田美好の

『雨のひぐらし』、川上眉上の『宝の山』とつづいている。その他にも同じ硯友社の渡辺乙羽、中村花瘦、石橋思案が作品を発表している。創成期の日本の児童文学は硯友社の存在ぬきにしては考えられないのである。ことに紅葉と小波の関係をぬきにしては、考えられないどころか、誕生もしなかったといえるのである。

『こがね丸』の成功がどれだけ重要だったかということは、同じく博文館が企画した『幼年文学』シリーズが、尾崎紅葉と巖谷小波が執筆しながらわずかに二巻で頓挫してしまったという事実でもわかる。このシリーズは紅葉が第一巻を担当し『鬼桃太郎』という作品を書いたが成功せず、そのまま終ってしまったのである。日本の幼年文学がそだたなかった原因の一つはこのシリーズの失敗、もつといえは紅葉の『鬼桃太郎』の失敗にあり、少年児童文学とは、はつきり明暗をわけたのである。

『こがね丸』がどれほど輝かしい成功をおさめ、高く評価されたかは、例えば木村小舟の『少年文学史』における小舟の激賞を見れば一目瞭然である。小舟は次のように述べている。

『こがね丸』を世に送った。ここに於てか我国の少年文学界には、遽然一大衝動を起し、正に黎明に光さし初めて残星立ちどころに其の光芒を収むるに似たる観があつた。……漣（小波）山人が、少年文学の第一人者として将来に其の盛名を恣にし、お伽文学に不動の基礎を築くべき第一歩は、茲に踏み出されしものである。

『こがね丸』の成功は小波の作家生活においても重大で、後に述べるように、小波自身に皮肉な意味をもつものでもあった。また巖谷小波を中心とした明治の児童文学を批判し、芸術性の高い新しい児童文学、いわゆる『赤い鳥』を中心に童話をつくりあげた鈴木三重吉でさえ、昭和三年の改造社版日本文学全集の『少年文学集』の冒頭に『こがね丸』をおき次のように評価している。

はじめて文学としての創造話篇に歓喜し得たのは、明治二十四年に出版された巖谷小波氏の『こがね丸』においてである。

これが『こがね丸』が出版された明治二十四年にはもつと激烈な賞賛がささげられている。例えば読売新聞には次のような記事をのせている。

文の海に先づ立ちそめの漣山人、「少年文学」という一風を吹かしたまひたり。今に見よ、此の小々波大人をも動かす巨濤となり、億万の幼童は、めでくつがえらん。

日本評論は次のように述べている。

此の明治の昭代、新文学の興隆の時にあたり、純な小児幼童のためにものせられたる著述あるを見ず。今や漣山人衆に率先して、こがね丸の著あり、われ年少き人々のために之を歎ぶ。

これを見て気がつくのは、読売といい、日本評論といい『こがね丸』を日本最初の創作児童文学と認めている点である。これはかならずしも正当な見方とはいえないが、文学作品としては、『こがね丸』しか評価できなかったとも考えられ、それだけ『こがね丸』がすぐれた作品だったという証拠でもある。

このように発表と同時に、『こがね丸』が日本の創作児童文学の原点と見なされるほど高い評価をうけたが、その理由は内容と文体が大きな意味を持っていたと考えられる。殊にその文体は、小説における文体の混乱期にあつただけに重要な要素であつた。そうした背景があつたからこそ、小波は『こがね丸』にあの特殊な文体を使い、あれほど成功をおさめながら、その文体を、その後使用しなくなつたのである。序文に見られる、わざと例の言文一致体を廃し、天晴れ時代ぶりたり、という小波の言葉も、それはまた文学における文体の混乱を示したものだつた。

ここでは『こがね丸』の内容には特にふれるつもりはないが、この作品の文体が内容と切っても切れない関係にあるのでかたんに説明しておくことにする。

この作品は、両親を金眸という巨大な虎に殺されたこがね丸という犬が、成長し、さまざまな艱難辛苦をへながら武者修業をし、最後に金眸を殺して親の仇を討つという物語である。ドラマチックな緊迫感にあふれた作品で、文学作品としてもすぐれているし、それを動物の世界として描いたのもこの作品をユニークなものにしている。テーマは親の仇討ちという、どちらかといえば古くさいものであったが、このストーリーは明治二十四年前後の時代の風潮をたくみにつかんでいたのである。当時の日本人は、金眸とこがね丸の関係の中に、当時の大清と日本の関係を読んでいたといわれる。作者小波がそうした時代風潮をつかんでこの作品を書いたかどうかはわからないが、意識的にせよ、偶然にせよ、時代風潮にのって、『こがね丸』は前記のような評判をかちとっていったのである。それに対し、文体についていえば、小波は意識的に時代風潮をはつきり利用していったのである。

いづれにせよ、この作品は日本児童文学の原点とされているが、その論議が正当であるかどうかは別として、『こがね丸』誕生直前における、つまり日本の創作児童文学誕生期における興味深い一つの試みにふれてみよう。実は博文館が日本の少年文学シリーズという企画を明治二十三年に発表す前年、創作児童文学をつくらうという企画がなされていたのである。それまで、日本には西欧的な児童文学は存在していなかった。ようやく明治に入って西欧の児童文学の存在に気がつき、明治二十年頃から日本に児童文学をつくらうという気運が生まれてきたのである。ちなみにルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』がイギリスで発表されたのが一八六五年、つまり明治維新の直前だった。発表と同時に大評判となったこの作品を、西洋文化熱にとりつかれていた明治初期の人達が知らなかったはずがない。

それはともかく、そうした氣運にのつて創作児童文学に挑戦したのは、大日本教育会だった。先生の集団が児童文学をつくらうというはじめての試みに挑戦したのは、それなりにうなずけるが、その大日本教育会が、明治二十二年に「少年書類懸賞法」なるものを発表した。少年書類という耳なれない言葉は今の児童文学のことで、明治においては、その後少年文学と呼ばれるようになった。つまりこれは日本で最初の創作児童文学の公募であった。その公募要項を見ると、最初に児童文学をつくらうとしていた人達がどのように児童文学を考えていたかよくわかるし、それと比較すると「こがね丸」という作品の特徴もはつきり浮びあがってくる。少くともこういうことはいえそうである。小波が「こがね丸」で公募に應じて、入選することはなかったはずだである。公募要項に、「こがね丸」は適合しないからである。

その要項とは、次のようなものであった。

少年書類懸賞法要項

一、本令ニ於テ懸賞ノ方法ニヨリ小学尋常科第一年級ヲ卒リタル児童ノ智識ヲ標準トシ、之ニ適スベキ趣味多キ書籍ノ著述ヲ世ノ有志者ニ募集スルコト。

一、文体ハ著述者ノ意ニ任スト雖モ、前項ノ児童ニ容易ニ解シ得ベキモノタルコト。

一、書中記載ノ事物ハ修身ニ益シ、又ハ艱難辛苦ヲ冒シ、主トシテ農工商上ニ身ヲ立タル者ノ事績或ハ理科ニ関スルモノタルコト。

一、原稿ノ紙数ハ十行二十字詰（挿画ヲ含ム）五十葉以上百葉以下タルベキコト。

一、寄稿ノ期限ハ明治二十二年九月三十日迄トス。

文体から見た日本児童文学の誕生

一、本令ニ於テ審査員若干名ヲ撰挙シ、本年内ヲ限り寄稿ヲ審査セシメ、其優等ナルモノヲ甲乙丙ニ区分シ、左ノ懸賞金ヲ本令ヨリ付与スルコト。

一、甲賞ヲ得タル者 金五拾円以下三拾一円以上。

一、乙賞ヲ得タル者 金三拾円以下二拾一円以上。

一、丙賞ヲ得タル者 金二拾円以下拾円以上。

一、前項の賞ヲ得タル者ト雖モ其書ノ版權ハ著述者ノ有ニ帰セシメ本令ニ於テ之ヲ印行セザルコト。(大日本教育会雑誌第八三号)

この要項を見て真先に気がつくことは、「農工商上に身を立たる者の事績或は理科に関するものたること」と「趣味多き書籍」という言葉である。ことに「土」を除いているところに興味が持たれる。後の明治の児童文学の主流が天皇を中心とする国家主義に流れ、主として「土」を描いたことを考えれば、創成期の児童文学を目ざした人々は健全だったといわねばならない。もつともその故に、この児童文学運動は失敗をまねいたのであったが。

しかしこの公募は順調ではなかった。公募の締切を延長しなければならなかったのである。もちろんその理由は、原稿が集まらなかったからである。

創作児童文学がまだ存在していなかった明治二十二年に、この要項を見ても児童文学を容易に書けなかったのはむりがないと思われる。メ切延長までして集った作品はわずかに二十四篇であった。当時の金額として最高五十円という賞金はかなりの魅力だったはずなのに、作品の数は今から考えると想像もできないほど少なかった。

この二十四篇から入選したのが三輪弘忠の『少年の玉』という作品であった。しかもそれが大日本教育会にとって

満足のいくものでなかったのは次の結果を見ればわかる。審査決議書が公表され、次のように述べられている。

本書固ヨリ欠点ナキニアラズト難亦少年書類募集ノ主旨ニ稍適スル所アルヲ以テ最下ノ賞金拾円ヲ交付スルノ価値アルモノト認ム。但シ多少ノ修正ヲ加ウベキ点アルカ故ニ本書ヲ公行セントスルトキハ修正ヲ了シ巻首ニ此全文ヲ掲載シ認定ノ事由ヲ明カニスベシ。

この一文は児童文学誕生の苦渋がそのまま読みとれるが、それだけ大日本教育会の児童文学によせる意気込みが大きかったこともわかる。その後この内容どおり種々の修正が加えられ、本として出版されたのは、明治二十三年十一月のことであつた。この作品にとつては時期的にも不運であつた。この後を追うように、それから二か月後に『こがね丸』が出版されたからである。

『少年ノ玉』は審査内容ではかならずしも満足のいくものではなかつたが、それが出版された時の予約広告では次のようにうたわれていた。

実ニ本邦少年書類ノ嚆矢ト云モ敢テ誣言ニ非ラザルベシ。

実際に日本の児童文学の誕生だったのである。この作品によせる期待も大きかつたのはうなずける。しかもバックに大日本教育会という全国的な教員組織がついており、常識的には、日本初のこの作品が最初の創作児童文学としてもつと注目を集め、高く評価されて当然であつた。現実にはほとんど問題にされないで黙殺されてしまったのである。具体的にいえば、その二か月後に出版された『こがね丸』が最初の創作児童文学だと大評判をとり、そのために『少年ノ玉』の存在意義が消滅してしまつたのである。これほど明暗を分けた二つの児童文学作品の類は少いが、それはともかく、『少年ノ玉』の失敗は、その内容と文体にあつた。

内容についてはかんたんに説明すると、国吉という貧しい家の少年が艱難辛苦をへて商業学校を卒業し商社につとめるが、やがてアメリカへ渡り、そこで電気を勉強し、日本に帰って電灯会社をつくって成功し、かつて自分をいじめた虎吉を会社でとりたててやるという物語である。このストーリーを見てすぐ気がつくことは、わずか五十枚たらずの原稿に、国吉の少年時代から大人になって成功するまでのことを書いており、そのため肉付けのないストーリーだけの作品になってしまい、文学作品と見た場合不十分なものだったということである。さらにいえば、この内容が文明開化的思想にもとずいており、明治二十三年頃は、すでに日本の国家主義が幅をきかせていたので、この種の作品が時代遅れになっていたのである。ちなみに作者三輪弘忠は小学校の先生で、この一作だけでペンをたっている。文学作品として稚拙だったとしても仕方ないことである。

文体も文学作品としては稚拙であった。この作品の文章について、審査委員は次のような評をして、修正を要求している。

文章ハ全体趣味少シ之ヲ世ニ公ニスルニハ大ニ修正ヲ加ヘ具ツ今少少平易ニシ……

当然出版された時修正が加えられたはずであるが、それでもなお趣味少し文体であることには変わりなかった。

具体的に本文をあげると、次のような文体であった。

一日、風雪ハゲシキ時、止ミガタキ主用アリテ、国吉ハミノカサニテ築地迄行キシニ、帰り道ニテ、三田ヘウツリ掛リノ橋ギハニ、一人ノ少年雪ノ中ニタフレタルヲ見出シタリ。国吉ハ、ナサケブカキウマレツキナレバ、スグニ抱キ上ゲ……客人ハドナタカ在ジマセンガ、ナンギヲ御スクイ下サイマシテ……
また会話体も同じように生硬な文体でつづられており、少し例をあげると次のようになっている。

国 若シ御前サンハ虎吉サンデハゴザイマセンカ、

虎 アナタハ国吉サンデゴザイマスカ……

当時小説でさえどのような文体で書いたらいいのか混乱していたくらいだから、児童文学をどのような文体で書いたらいいのかわかるはずがなかった。だからこそ要項で「文体ハ著述ノ意ニ任ス」というような条項が加えられたのである。三輪弘忠の文体は当時の小学校の教科書の文体に近いものであった。三輪弘忠が小学校の先生だったことを考えれば、それはそれなりに理解できるが、やはり趣味少く、当時の人々の評判にならなかったのも当然であった。そこに『こがね丸』があの独特の文体を駆使して出現したのである。この勝負の結果は明白であった。

『こがね丸』の作者巖谷小波は硯友社に属していたが、実は早くより言文一致体をとなえており、同じく言文一致を主張していた山田美妙とともに、硯友社では特異な存在であった。したがって博文館から少年文学シリーズの第一巻を書くようにと依頼をうけた時、言文一致体で作品を書こうと考えたはずである。それを妨げたのが、紅葉の『二人比色懺悔』の文体であった。その前年名著百種の第一巻として発表された『色懺悔』は大評判をとっており、同じ硯友社の一員だった小波が、その成功が紅葉の新しい文体にあることに気がつかないはずがない。その迷いが『こがね丸』の序文にそのままあらわれているのである。小波はこう述べている。

されば文章に脩（修）飾を勉めず、趣向に新奇を索めず、只管少年の読み易からんを願ふて、わざと例の言文一致を廃しつ、時に五七の句調など用いて、趣向も文章も、天晴れ時代ぶりたれど、是却つて少年に誦し易く解し易らんか。

ここで小波がいつていることは、従来の言文一致体で作品を書くことをやめ、時代に合った文体を使ったということである。ただここでは具体的に何も説明していないので、「天晴れ時代ぶり」とは何をいつているのか、これだけではわからない。また従来の主張である言文一致体をどうして避けたのかも語られていない。小波が『少年ノ玉』の失敗を知っていたかどうかは別として、もし知っていたら『少年ノ玉』の失敗がその文体にあることに気がついていたはずであるが。

しかし『こがね丸』の文体と何よりも関係の深いのは、尾崎紅葉の『色懺悔』の文体であつた。

明治二十二年に紅葉は吉岡書店が企画した日本最初の文庫本ともいふべき新著百種の第一巻を書くように依頼された時、どのような文体で書くか悩みぬいた末に、この作品の序文で述べているような独特の文体をつくりあげたのである。しかもこの作品は大成をおさめ、その成功がきっかけで、硯友社の同人達が次々と文壇に登場するようになるのである。それと同時に硯友社の雅俗折衷体の文体が確立し、硯友社の作家達はこの文体を基本に小説を書いていった。小波が『こがね丸』の執筆にとりかかうとしていたのは、そうした硯友社のはなばなしい活動がはじまりかけた明治二十三年のことだった。紅葉が脚光をあびはじめた時である。『色懺悔』には、序文として紅葉の興味深い文体論が掲載されているが、それは次のようなものである。

一 此小説は涙を主眼とす

一時代を説かず場所を定めず。日本小説に此類少し。いかなる味の物かと好心に試みたり。難者あらば。ある時ある處にて。ある人々の身の上譚と答ふべし

一 文章は存来の雅俗折衷おかしからず。言文一致このもしからずで。色々氣を揉みぬいた末。鳳か鶏か——虎か猫

か。我にも判断のならぬかゝる一風異様の文體を創造せり、あまりお手柄な話にあらずといへど。これでも作者の若勞はいかばかり。それをすこしは汲分て。御評判を願ふ

一對話は淨瑠璃體に今時の俗話調を混じたるものなり。惟みるに、これを以て時代小説の談話體にせんとする作者の野心

一前述の通り、世間在來の文とは。下手なりに趣を異にすれば。讀者一見して。うまいといふ。作者は少しもつらからず。我つらかざるを人々何ゆへにつらしといふや。専ら句讀をたよりに再讀の御面倒を請ふ

この序文における文体論は明解なので特に説明の要はないが、ただ一言ふれておかなければならないのは、紅葉が西鶴の影響を強くうけていたということである。ともかくこの作品によつて硯友社の雅俗折衷体という一つの文体が生まれ、それが歡迎されたのである。またこの紅葉の成功の陰で、二葉亭四迷が言文一致体で書いた『浮雲』が失敗し、未完に終つていたのである。小波が言文一致体で書くことに不安をおぼえたのは、案外こんなところにあつたのかもしれない。

小波は『こがね丸』の発表以後児童文学の一人者として明治の児童文学をリードしていくが、その成功の秘密は時代の流れにたくみにのつて作品を書いていったところにある。内容、文体ともそうであつた。

いずれにしても『こがね丸』序文の「天晴れ時代ぶり」の文体というのは、紅葉の『色懺悔』の文体、雅俗折衷体であることはまちがいない。文に修飾をもとめた紅葉の文体と、修飾をもとめなかつた小波の文体は、修飾云々に関しては違いはあるものの基本においては同根である。むしろ修飾をもとめないという小波の言葉は、紅葉の『色懺悔』の文体に対して述べた言葉である。『少年ノ玉』のような文体や、当時の言文一致体の文体を対象にしたら、『こ

がね丸」の文体は修飾をもとめないどころか、はるかに修飾をもとめているからである。

それなら「色懺悔」の文体は具体的にどのようなものであったのか、小波の雅俗折衷体はどのようなものであったのか例をあげてみよう。次の文は「色懺悔」の冒頭の一節である。

蕭寂はそも如何ならん。片山里の時雨あと。晨より夕まで。昨日も今日も風の烈く。あるほどの木々の葉——峯の松のみ残して——大方吹落しぬれば。山は面瘠せて哀に。森は骨立ちて凄じ。

この紅葉の文体は読み易くリズムカルで従来の雅俗折衷体に比べてはるかに平易だということがわかる。紅葉は従来の雅俗折衷をおかしからずと批判したが、その文体とは、明治十年代の政治小説における文体をさしている。具体的には矢野竜溪の『経国美談』、東海散士の『佳人之奇遇』、未広鉄腸の『雪中梅』などの文体をさしている。いずれも漢語を主体とした硬質、難解な文体で、十年代の自由民権運動を背景に書かれたものだった。しかし、そうした政治運動には適した文体ではあったが、そうした政治運動が沈静化にしたがい文体そのものも新しいものをもとめられていたのである。

この地の文に対し、紅葉がいうところの浄瑠璃体の会話体というものは、次のようなものであった。これは山中の庵で出逢った二人の尼僧がかわしている会話である。

「頼む。」と音なふ女の聲。鉦の音息みて。

障子の外に現れしも法體の女人。鼠木綿の布子に墨染の腰法衣。頭巾着たるが外面を窺ひ。

「何御用でござりまする。」

「是は行脚の比丘尼。慣れぬ山路に迷ひ。難義を致しまする。御無心ながら一夜の宿を御願ひに。御看經のお邪魔

致しました。」

寒さに慄^{おそ}く聲なり。

「御覽の通の荒屋^{あげうや}。夜の物として御座りませぬが。お厭ひなくば。さゝお入遊ばせや。」

幽切れのいい読み易い会話体である。この作品は山里の庵で偶然出逢つた若い二人の尼僧が、どうして若い身で尼僧になったか語り合っているうちに、それぞれが尼僧となった原因の若い武士が同一人物だったと気がつくというのが前半である。後半はその若い武士がこの二人の女性とどのようにかわりながら死んでいったかという物語になっている。ストーリーが趣向に富んでおり、この物語を念頭において小波は『こがね丸』の序文で趣向に新奇を索めず」と述べていると思われる。単純に考えれば『こがね丸』自体趣向に富んでいるから、小波の言葉はあくまでも比較の上においてのことだといえる。小波の文体についての言葉も同じことがいえる。

文体とストーリーが密接な関係にあることはいうまでもないことだが、『色懺悔』という感傷的で、紅葉の言葉を借りれば、涙を主眼とした悲劇的な時代小説にとつては、この紅葉の文体がいかにもしっくりしていたことがわかり、当時評判になったことはそれなりに理解できる。しかしこの文体が現代小説に適用できないということも容易に理解できることで、後に紅葉が現代小説を書く場合、雅俗折衷体と言文一致体のはざままで激しく揺れたのも当然のことであつた。それに対して小波の場合は、こうしたはざまで揺れるということとはなかつた。『こがね丸』の文体に固執しないどころか、これ以後ここにおける文体を二度と使わなかつたからである。

当然『こがね丸』の成功もストーリーに対して文体が適合していたからだといふことができる。『こがね丸』はかならずしも時代小説ではなかつたが、親の仇を討つという物語はやはり一種の時代小説だと考えられるのである。し

かし、小波は『こがね丸』を書くにあたっての序文では『色懺悔』にはまったくふれていない。その理由はともかく、その創作の動機を次のように述べている。

作者此の『こがね丸』を編むに当りて、彼のゲーテの狐の裁判、其他グリム、アンデルセン等の奇異談、また本邦には桃太郎、かちかち山を始とし、古きは今昔物語、宇治拾遺などより、天明ぶりの黄表紙類など、種々思い出して、立案の助けとなせしが、されど引用書として名記する程にもあらず。文学界にはまず稀有のものなるべく、威張っていえば一の新現象なり。

小波は自分の作品に対してこのような自負を述べているが、天晴れ時代ぶりたる文体を使うためには時代小説しかないとなっていたはずである。だから犬や虎を登場させながら、それを仇討ち物語にしていた、時代小説化していったのである。ここで気がつくのは、実は『少年ノ玉』という作品も黒犬と白犬が争っている場面からはじまり、犬が重要な役割を演じていたということである。

小波にとって『こがね丸』の文体がどれほど特異なものであったかということは、小波が雅俗折衷体をこの作品だけでやめてしまったことでわかる。大正に入って小波が『こがね丸』を言文一致体で書きかえたのも、この文体が小波にとっていかに異質なものであったかという証拠である。しかし皮肉なことに、今日『こがね丸』といえば、明治二十四年に発表された作品をさしている。しかし小波にとってもっと皮肉なことは、この天晴れ時代ぶりで、例外的な文体で書いた唯一の作品が大成功をおさめ、日本児童文学の原点とされて今日にいたっているということである。

この皮肉は少年文学シリーズの中にも見られる。『こがね丸』の文体を説明する前に、小波の本来の文体はどういうものであったのかを、このシリーズの小波の他の作品を使って説明してみよう。

小波は「こがね丸」の成功もあって、実は少年文学シリーズに、他に二つの作品を発表している。それは第九巻の『当世少年氣質』と第十三巻の『暑中休暇』という作品である。どちらも現代、といっても明治二十年前後の現代だが、を扱った短篇集である。したがって時代小説用の『こがね丸』の文体が使用できなかったのは当然だが、問題はこの二作で広い意味の時代小説を、つまり、『こがね丸』の文体が使える世界を描かなかったことである。そういう意味では、小波は早くから雅俗折衷体で作品を書くことの限界を悟っていたのかもしれない。まただからこそ独特の口語体で児童文学を書きつづけられたのである。硯友社の中でいち早く言文一致体、つまり口語体で小説を書き、誰よりも長い作家活動をした徳田秋声と一脈通じるものがある。

『当世少年氣質』は「鶏群の一鶴」「十歳で神童」など八篇の短篇からなっており、『暑中休暇』は「遊泳」「復習」など七篇からで、主として上流階級の少年を描いている。ここで問題にしたいのはその文体で、例えば「復習」という短篇は次のような言文一致体で書かれている。

此日も例の通り小僧は遣つて来た故、いざ言葉を掛けようと思つたが、そこがまた小兒、無遠慮の様でもあるが、また妙にはにかむ心も出て、何か云はうとしては、云い出し兼ねてさし控へ彼方で何とか云つたなら、それを機会に切り出さうと、云はゞ睨み合いの体になった。

これに対して会話は次のようになってゐる。「お前何処に居るの?」「三田の精乳舎に居るんです」「それじゃ、毎朝牛乳を配つて歩行くんだネ?」「ええ、もう配つて来たんです」

この文体は現代の口語体とはほとんど変わらないのがわかるし、さらにその内容を考えて、小波はすでに大正時代の「生活童話」に近いものを、少年文学シリーズに書いていたのである。木村小舟は『少年文学史』の中でこの両

書を高く評価して次のようにのべている。

今日の所謂「生活童話」が、既に早くここに萌芽しつつある……これ等の新様式によって此二冊の編まれすることは、正しく作者先見の致す所といふべく、近年隆盛を極めたる「童話」が、端をここに発したるか否かは、殊更穿鑿の要あるを見ずとするも……

残念ながら小波は、後の童話の原点に相当するようなこの二作を書きながら、やがて有名な小波お伽噺の世界へ移ってしまうのである。しかし鈴木三重吉の童話運動の先駆的役割を果たしたことはまちがいなく、少年文学シリーズの小波の三つの作品はそれぞれ見のがすことのできない意味を持ったものと考えられるのである。しかし同時に、後の童話運動とは無縁だった小波にとっては、『こがね丸』と同じようになんとも皮肉な作品になってしまったのである。

ここで『こがね丸』の文体に戻って具体的に考えてみよう。小波がその序文でわざと例の言文一致を廃しつ、と述べているのは、先の「復習」における文体をさしていることで、それを廃したのは、紅葉の『色懺悔』の成功を見たからで雅俗折衷体で作品を書いたら成功するのに気がついたのである。当然この文体を使えば時代小説になり、その故に、仇討ちの物語を作ったにちがいない。あるいは仇討ちの物語が頭に浮び、紅葉の文体を選択するようになったのか、そのあたりは明確ではないが、このような仇討ちの物語を紅葉の雅俗折衷体で書けば成功すると思っていたことだけはたしかである。「文学界には先ず稀有のものなるべく、威張っていえば一の新現象なり」という自負はみごとに適中し、『こがね丸』は大成功をおさめたのである。その冒頭の文章は次のようなものである。これがどうみても『暑中休暇』の文体より紅葉の『色懺悔』の文体に近いということは論じるまでもないであろう。地の文と会話は次のように構成されている。

むかし或る深山の奥に、一匹の虎住みけり。幾年月をや經たりけん、驅尋常の獵よりも大く、眼は百鍊の鏡に似て、鬚は一束の針を欺き、一度哮ゆれば聲山谷を轟かして、梢の鳥も落ちなんばかり、一山の豺狼麋鹿、畏はぬものもなかりしかば、ます／＼猛威を逞うして、自ら金眸大王と名乗り、数多の獸類を眼下に見下して、一山萬獸の君とはなりけり。

頃しも一月初つ方、春とは云へど名のみにて、昨日からの大雪に、野も山も岩も木も、冷き綿に包まれて、寒風坐ろに堪へ難きに、金眸は朝より洞に籠りて、獨り蹲まり居る處へ、兼てより氣に入りの、噓水といふ古狐、蛆傳ひに雪踏み分て、漸く洞の入口まで來たり、雪を拂ひてにじり入り、まづ慇懃に前足をつかへ、(昨日より大雪に外邊に出る事もならず、洞にのみ籠り給ひて、さぞかし徒然におはしつらん。)と云へば、金眸は身を起して、(おゝ噓水なりしか、よくこそ來つれ。實に爾が云ふ如く、此大雪にて外出もならねば、獨り洞に眠り居たるに、食料漸く空しくなりて、やゝ物欲う覚ゆるぞ。何ぞ好き獲物はなきや。……此大雪なれば無きも宜なり。)と嘆息するを、噓水は打消して、(いやとよ大王。大王若し實に物欲くて、食料を求め給ふならば、僕れ好き獲物を進せん。)

小波はこのように天晴れ時代ぶりたる文体を駆使して『こがね丸』で大成功をおさめ、日本の児童文学の基礎をきずいたが、しかしその後二度とこの文体で作品を書かなかつた。その後歴史物、時代物を書かなかつたどころか、おびただしい歴史物を書きながらこの文体にもどることはなかつたのである。その理由はこの文体が児童文学には適合しないと考えたからか、紅葉に追従するのをきらい、独自の文体で作品を書きたかつたのか、あるいはその両方であつたのかもしれない。後に小波調といわれる独特の文体で明治の児童文学の主流をなしたことを考えれば、『こがね

丸』の文体をどうして使わなくなったのか納得できるところである。

しかし日本児童文学の原点といわれ、小波の代表作である『こがね丸』の文体だけが、小波本来の文体でなかったということは、小波にとつても、日本の児童文学にとつてもなんとも皮肉である。皮肉といえば、間接的にしろ児童文学誕生の文体を創造した紅葉が、その文体故に児童文学では失敗したということである。同じ博文館の幼年文学シリーズの第一巻を担当した紅葉は『鬼桃太郎』という作品を発表したが、幼年文学としては文体も内容も趣向にこりすぎて失敗したといわれている。その紅葉の文体を使つて一方では成功した『こがね丸』の存在を考えると、紅葉の失敗は小波の比ではなかったのかもしれない。

参考文献

- | | |
|----------|----------------|
| 少年ノ玉 | 三輪弘忠 |
| こがね丸 | 敝谷小波 |
| 当世少年氣質 | 敝谷小波 |
| 暑中休暇 | 敝谷小波 |
| 二人比丘尼色懺悔 | 尾崎紅葉 |
| 二人掠助 | 尾崎紅葉 |
| 鬼桃太郎 | 尾崎紅葉 |
| 少年文学史 | 木村小舟 |
| 少年文学集 | 現代日本文学全集（改造社版） |

黎明期の歴史児童文学

勝尾金弥

文体から見た日本児童文学の誕生